



一貫コース通信

多様性の誤解

「多様性（ダイバーシティ）」という言葉が、少し一人歩きを始めているのではないかと思う。近頃、「様々な異なる意見や考えを受け入れるべきだ」という考え方を、多様性を認めることだと勘違いして、違いを受け入れてもらうことを求めがちになってしまっているように思えるのだ。多様性（もしかしたら国際的〇〇という言葉も）に拒否感を感じている方の中には、この「何でもあり」という風潮に嫌悪感を抱いている方も多いのかもしれない。しかし、本来の多様性は、何でも受け入れるべし、ではないはずだ。ここは一度立ち止まって、もう一度多様性について考えてみたい。

「多様性」の意味を辞書で調べてみると、『①いろいろな種類や傾向があること ②変化に富むこと』とある。つまり、多様性を認めるということは、「人の考えや特徴には色々な種類があり、その違いを認める」という意味になる。

学校でも家庭でも職場でも、Aが正しいと言う人とBが正しいと言う人に分かれることはよくあることだ。これは、それぞれの考えや価値観は、生まれ育った環境、教育の違いから発生するためであり、また一つのものごとでも、見る角度から異なる意見を導き出せるからである。A、Bどちらの意見も、その人なりに導かれた正義や正論の答えだから、もし一方を否定すれば、人格を否定されたという気分になってしまうかもしれない。よって、まず相手の考えを聴く姿勢はとても大切であり、それこそが多様性を認める第一歩となるのだと思う。学校でも家庭でも（あるいは国レベルでも）、この姿勢は大変に重要である。

友達など個人同士の場合は、相手の考えや価値観に合わせることは本人が決めていくことだ。だから相手が好きなものごとを、自分も受け入れなくてはいけないわけではない。ところが、「社会」ではそういうわけにはいかない。認めるだけでなく、受け入れることもしていかなければ、全体が前に進むことはできないからだ。そのときに大切になってくるのが、お互いの上位にあるもの（定義）は何か、であろう。学生なら、その上位にあるのは学校のルール、家庭なら各家庭のルール、仕事なら会社（組織）のルールがそれだ。そして、いずれにも共通する、さらにその最上位にあるのが「社会」のルールである。従って、様々な意見を認めた中で、上位にあるルールに則って最適なものは何か、を考えることこそが、多様性を受け入れるということではないだろうか。

そういう意味では、大人や学校に与えられている役割は大きいと感じている。子どもたちは、各家庭と社会の間に位置しているからだ。だから、学校だけではなく、社会のルールを考えさせた上で、多様性について考えられて、認めることができ、受け入れることができる人材に育てていきたい。

